



## 11月 七五三

こんにちの七五三とは、11月に3歳の男女児、5歳の男児、7歳の女兒に晴れ着を着せて神社に詣でる習慣のことをさします。子供が無事に健やかに成長したことを祝う行事ですが、子供が一人前の人となっていくことを示す目的もありました。

### ○七五三の歴史

もともとは平安時代以降の宮中や公家、鎌倉時代以降の武家の間で行われていた人生儀礼で、男女ともに2～3歳のときに髪を伸ばし始める「髪置き」、5歳ごろに袴をつける儀式である「袴着」を行っていました。

江戸時代になると宮中や武家の行事が庶民の間にも広がり、3歳の男女は髪置き、5歳の男児は袴着、7歳の女兒は、これまで付けていた子供用の紐を落として大人と同じように帯をしめる「紐とき」または「帯とき」という儀式をおこないます。地域によっては、5歳の女兒や7歳の男児も祝います。特に子供は7歳で社会の構成員の一人になるとされたため、7歳の祝いは盛大に行われました。ここには「7歳までは神のうち\*」という考え方もあったとされています。

祝う日にちが11月15日に定まったのは、江戸幕府五代将軍徳川綱吉の子である徳松の祝いからという説や、陰陽道でいう吉日だからという説など、様々な説があります。

これらの儀式は、子供の成長をその節々で神仏に感謝し、さらなる成長を祈るものとして行われ、伝えられてきました。

### ○八千代のオビトキ

八千代市内でも、7歳の祝いはオビトキまたはヒモトキと呼ばれ、総領\*の子供の時は男女ともに結婚式と同じくらい盛大に祝われました。11月15日に祝うのは最近のことで、以前は麦蒔きや脱穀が忙しかったため、12月の都合の良い日や大安の日に行っていました。

#### ◇ 祝いの準備

実家からは米や祝い金などが贈られ、祝う側からは五升餅を届けます。仲人\*にも五升餅、親戚には三升餅を配ります。餅は竹で編んだ籠に杉の葉を敷きつめ、その上に載せてサンダワラで蓋をします。これを「餅籠」といいます。この餅は祝いの会の招待の意味があり、祝いの会の1ヶ月くらい前に配ります。



餅籠の籠  
当館蔵

## ・祝い当日

祝いの当日は、ムラの女性たちがハタラキとして手伝いにきて、餅をつきます。祝いの会の最中に宮参りに行き、家の神、次に氏神、そして鎮守様を詣でます。神社では赤飯やお菓子が配られました。

最後に仲人が子供を箕の中に置いた重ね餅の上に乗せ、そこで着物の付け紐を取ります。この機会にシンショウワタシ\*をすることも多いようです。こうして無事に7歳になると、ムラの子として子供集団の一員となりました。



オビトキ  
平成15年撮影

## ○最近の祝いのかたち

紐ときの祝いの形も、時代とともに変化してきました。かつて祝いの会場は家でしたが、今では式場などで行われることが多くなり、ハタラキも頼まなくなりました。招待の方法も餅を配る風習は平成に入る頃より糯米を配るように変化し、やがてそれも餅代として現金を配るようになりました。

村上地区の七百餘所神社の神主によると、11月15日に近い日曜日に神社で七歳の子に祈祷を行います。紐をとる儀式自体は、ここ数年間なくなつたとのこと。

しかし、子供の成長を喜ぶ家族の思いはいつの時代も変わらず、七五三の行事は形を変えつつ今も続けられています。



7歳児用着物  
当館蔵

本内容は、2010年11月より郷土博物館旧ホームページ内「民俗探検隊」コーナーで掲載していた記事を再編集したものです。



### \*ちょっと付け足し

- ・「7歳までは神のうち」…医療が発達していなかった頃の小さな子供は未熟で脆い存在だったため、生まれてから7歳までは神の子として育つ、という考え方。
- ・総領…家の名を継ぐ子のこと。長男または長女の場合が多かった。
- ・仲人…結婚の際、両家の間にたって世話をする人のこと。この場合は子供の両親の仲人。
- ・シンショウワタシ…親が子を新たな家長として認め、家長権（家をまとめる権利）や家の財産を譲り渡すこと。子の結婚や、孫の誕生や成長の段階など、行うタイミングは様々だった。

参考文献：八千代市『八千代市の歴史 資料編 民俗』平成5年  
八千代市歴史民俗資料館『企画展図録 七歳までは神のうち』平成9年  
大塚民俗学会編『日本民俗辞典』昭和50年  
第一法規『日本民俗資料事典』昭和47年  
八千代市教育委員会『千葉県八千代市 神野の民俗』昭和51年  
都留文科大学民俗学研究会『千葉県八千代市勝田 勝田の民俗 民俗調査報告 第8号』昭和58年  
吉川弘文館『日本民俗大辞典 上』平成11年

### やち博ライブラリー 第6号

発行日 令和2年12月1日  
編集・発行 八千代市立郷土博物館